The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上博楚簡『荘王既成』の「予言」
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	中国研究集刊. 2007, 45, p. 44-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61186
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『戦国楚簡研究２００７』（『中国研究集刊』別冊特集号（総四十五号）　平成十九年十二月　四四―五六頁

上博楚簡『荘王既成』の「予言」

湯浅邦弘

序言

『上海博物館蔵戦国楚竹書』第六分冊（馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇七年七月）には、春秋期における楚国の王や太子に関わる文献が複数収録されている。本稿では、その内の『荘王既成』を取り上げ、全体を解読した上で、文献の基本的性格と著作意図とについて考察を加えてみたい。

初めに、『上海博物館蔵戦国楚竹書』第六分冊の説明に従い、『荘王既成』の竹簡形制を掲げておく。『荘王既成』は、『申公臣霊王』と同冊で計九簡。第四簡の墨釘を境に、前が『荘王既成』、後が『申公臣霊王』である。

簡長は三三．一～三三．八cm。幅は〇．六cm。厚さは〇．一二cm。すべて完簡。簡端は平斉。両道編綫。右契口。簡頭から上契口までは八．九～九．五cm。上契口から下契口までは一五cm。下契口から簡末までは九．二～九．三cm。満写簡で、上下に留白はない。

字数は、第三簡までは各二十六字。第四簡墨釘までは十一字で、計九十三字。第一簡背面に篇題と思われる「荘王既成」の四字がある。

一　『荘王既成』釈読

まず、『荘王既成』の原文、書き下し文、現代語訳を掲げる。なお、ここに言う原文とは、『上海博物館蔵戦国楚竹書』第六分冊の原釈文（担当は陳佩芬氏）を基に、諸氏の見解を参考にしつつ、最終的に筆者が確定したものである。文字の認定・釈読に問題があるものについては、後の語注で解説を加える。また、01・02などの数字は竹簡番号、「■」は墨釘を表す。

01莊王既成無射、以問沈尹子桱曰、「吾既果成無射、以供春秋嘗、以02待四鄰之賓、吾後之人、幾何保之」。沈尹固辞、王固問之、沈尹子桱答03曰、「四與五之間乎」。王曰、「如四與五之間、載之傳車以上乎。抑四舸以04逾乎」。沈尹子桱曰、「四舸以04逾」■。

莊王既に無射を成し、以て沈尹子桱に問いて曰く、「吾れ既に果く無射を成し、以て春秋の嘗に供し、以て四隣の賓を待す。吾が後の人、幾何か之を保たん」。沈尹固く辞するも、王固く之を問えば、沈尹子桱答えて曰く、「四と五との間ならんか」。王曰く、「如し四と五との間ならば、之を伝車に載せて以て上さんか。抑も四舸以て逾さんか」。沈尹子桱曰く、「四舸以て逾さん」。

楚の荘王は十二律の一つである無射の大鐘を鋳造し、沈尹の子桱に問うて言った。「私はすでに無射を完成させ、その大鐘を祖先の祭りに供し、またその大鐘で周辺諸国からの賓客をもてなした。では、私の後の楚王は、この鐘をいつまで保つことができるであろうか」。沈尹は答えを固辞したが、王が強く問うたので、次のように答えた。「四代目と五代目の間くらいでしょうか」。王は、「もし四代目と五代目の間くらいだとすれば、それは、無射を駅車によって中原の国に持ち去られることを意味するのか。それとも、四艘仕立ての大船によって長江下流の国に持ち去られることを意味するのか」。沈尹子桱は言った。「四艘仕立ての大船によって長江下流の国に持ち去られるでしょう」。

語注を加えておこう(注一)。

「荘王」は、春秋時代の楚王。在位は前六一三～前五九一年。「三年不蜚不鳴」(『史記』楚世家)の後、諸国を次々に平定、周の定王に鼎の軽重を問い、春秋の五霸となった。諡で記されていることから、この文献の筆写時期は、荘王の没後であることが分かる。

「無射」について、原釈文は「無矢(敵)」と読む。恐らく、篇題が「荘王既成」の四字であることに鑑み、「荘王既に成り、敵する無し」と解釈したのであろう。しかし、そう読むと、直前の「成」の目的語がなくなり、また、後文の「載」が何を載せるのかが分からなくなる。篇題は必ずしも句の区切りを示すものではない。例えば、

本篇と同じく『上海博物館蔵戦国楚竹書』第六分冊に収録されている『慎子曰恭倹』は、確かに、第三簡背面に「慎子曰恭倹」とあるが、これは便宜上冒頭の五字をとったもので、文意としては、以下に続いている。「曰」の指す内容は「恭倹」の二字だけではない。

これに対して、陳偉は、「無鐸」と読んだ上で、「鐸」は「射」の通仮字であり、曾侯乙編鐘銘文中にも、「無射」を「無鐸」「無睪」と記す例があると指摘する。ここは、陳偉説に従い、無射（ぶえき）という大鐘（音階の十二律の一つ）を鋳たことを指すと考えておきたい。なお、陳偉氏が指摘するとおり、無射は周の景王が鋳たという故事（『左伝』昭公二十一年、『国語』周語下）で著名である。

「沈尹子桱」の「沈」字、原釈文の隷定は「醓」であるが、同時に、原釈文は、『呂氏春秋』に記載される「沈尹莖」と推測する。確かに、『呂氏春秋』不苟論贅能篇には、荘王を霸者に押し上げた功労者として沈尹莖を高く評価する言葉が記されている(注2)。

「果成」について、原釈文は「果城（成）」と隷定した上で、「果」字については、『孟子』梁恵王篇に「君走、以不果來也」、その趙岐注に「果、能也」とあるのを指摘する。

「春秋之嘗」の「嘗」は、その年新しくとれた穀物を祖先の霊に供える祭り。「嘗烝」（『礼記』王制篇）は、天子や諸侯が祖先の霊をまつるために行う祭り。秋に行うのが嘗、冬に行うのが烝。「供春秋之嘗」とは、完成した無射の鐘を、祖先の霊をまつるための祭礼に使用した、との意であると考えられる。

「待四鄰之賓」、原釈文は「侍四鄰之賞」と釈読する。恐らく、四方の隣国からの賞（賛）を奉る、の意に取ったものと思われるが、やや意味が通りにくい。ここでは、「待」は何有祖・李学勤・沈培に従い、「賓」は蘇建洲に従って読み、周辺諸国からの賓客を歓待するための宴席に無射を披露したとの意であると考えたい。上句とともに、「以〜〜」「以〜〜」という対構造になっているので、荘王が無射の完成を喜び、さっそく使用したことを二句に分けて述べていると思われる。

「吾後之人」の「吾」字は文意により補った。もともとは竹簡が不鮮明のため判読できない字である。陳偉は「吾」、凡国棟は「朕」に読む。いずれにしても、荘王以後の人（王）の意であろう。

「幾何保之」について、原釈文は、「豈可保之」に釈読するが、ここを反語に読むと、以下の答えが不自然となる。ここは、陳偉が「幾何」と疑問に読むのが良いであろう。

「四與五之間」は、本篇の主題に関わる文言である。原釈文は、『周易』習坎☵の文意を援用するが、意味が取れない。ここは、荘王以後、四～五代で現状の隆盛を保持できなくなり、完成した大鐘（無射）を手放すことになるとの予言を述べた箇所であると推測される。ちなみに、荘王以後の歴代楚王は次の通りである。なお、陳偉、董珊、凡国棟なども、「四、五」を楚王の世代数と取っている。

〈王名〉	〈在位年〉
荘王	前六一三～五九一
共王（荘王の子）	前五九〇～五六〇
康王（共王の子）	前五五九～五四五
郟敖（康王の子）	前五四四～五四一
霊王（公子囲、康王の弟）	前五四〇～五二九
訾敖（公子比、康王の弟）	前五二九
平王（棄疾、康王の弟）	前五二八～五一六
昭王（平王の子）	前五一五～四八九
恵王（昭王の子）	前四八八～四三二
簡王（恵王の子）	前四三一～四〇八

「載之傳車以上乎」は、四、五代後に大鐘（無射）を奪われるとすれば、それは、伝車（駅車）によって持ち去られるのか、つまり楚は中原の国によって滅亡の危機に晒されるのか、の意であると思われる。

「抑」字、原釈文は「殹」に隷定した上で、「也」と読み替え、「緊（えい）」（語助詞）の意に解するが、句の冒頭にこの字がくるのはやや唐突である。ここでは、凡国陳が「噫」または「抑」とするのに従った。前句と後句とを繋ぐ助辞。それとも、の意であろう。

「四舸以逾乎」、原釈文は「四舸（軻）以逾乎」と釈読するが、原釈文の注釈では「舸」は「舸」の古文であるとし、『方言』に「南楚江湘、凡船大者謂之舸」とあるのを指摘する。四、五代後に無射を奪われるとすれば、それは、大船によって持ち去られるのか、つまり長江流域の国によって滅亡の危機に晒されるのか、の意であろう。

これは、楚昭王十年（前五〇六）の呉師入郢に関わる予言である。楚は、昭王十年に、呉王闔閭の軍隊によって都の郢を抜かれ、遷都を余儀なくされている。陳偉は、『淮南子』泰族訓に「闔閭伐楚、五戰入郢、燒高府之粟、破九龍之鐘、鞭荊平王之墓、舍昭王之宮」とあるのを指摘する。

また、「逾」字について、原釈文は、『説文』に「進」とあり、『尚書』に「越」の意があることを指摘するが、

陳偉は他の簡帛および『国語』呉語に「下」と訓ずる例があるとし、「順水而下」の意であると説く。前句の「載之傳車以上乎」の「上」字との対応を考慮すれば、「下」の意とするのが良いであろう。

二　「無射」と予言

次に、本篇の主題と著作意図について考察してみよう。本篇を理解するための重要な比較材料として注目されるのは、『国語』周語下に見える景王の故事である。

周の景王（在位は前五四四～前五二〇）は、在位二十一年（前五二四年）に「大銭」（大型貨幣）を鋳造しようとした。王の卿士の単穆公は、民の財貨を奪って災害を増やすことになりますと諫めたが、王は聴かず、大銭の鋳造に踏み切った(注3)。そして景王は、その二年後、今度は、十二律の一つである無射の大鐘を鋳造しようとした(注4)。これに対して、単穆公は、「三年の中にして、民を離すの器二有り。国其れ危うきかな」と再び諫めた。二年前の「大銭」の一件に続いて、民心の離反を招くような行為は、国家の危機につながるというのである(注5)。

そこで景王は、楽官の伶州鳩に問うたが、伶州鳩は、音楽理論の上からも弊害があるとして無射の鋳造に難色を示した(注6)。しかし景王は、結局、無射を鋳た。二十四年に鐘は完成して、鐘声は一旦調和したが、伶州鳩の「今三年の中に、害金再び興る。一の廃れんことを懼る」との予言通り、二十五年、王は崩御して、鐘声は調和しなくなった(注7)。

なお、『左伝』昭公二十一年では、この伶州鳩の言は、より明快な王の死の予言となっている。

二十一年、春、天王將鑄無射。泠州鳩曰、王其以心疾死乎。夫樂、天子之職也。夫音、樂之輿也。而鐘、音之器也。天子省風以作樂、器以鐘之、輿以行之。小者不窕、大者不槬、則和於物、物和則嘉成。故和聲入於耳而藏於心、心億則樂。窕則不咸、槬則不容、心是以感、感實生疾。今鐘槬矣。王心弗堪、其能久乎（二十一年、春、天王将に無射を鋳んとす。泠州鳩曰く、王其れ心疾を以て死せんか。夫れ楽は、天子の職なり。夫れ音は、楽の輿なり。而して鐘は、音の器なり。天子風を省みて以て楽を作り、器以て之を鐘め、輿以て之を行う。小なる者は窕ならず、大なる者は槬ならず、則ち物に和し、物和すれば則ち嘉成る。故に和声耳に入りて心に蔵し、心億せば則ち楽しむ。窕なれば則ち咸たず、槬なれば則ち容

れず、心是を以て感じ、感ずれば実に疾を生ず。今鐘槬なり。王の心堪えず、其れ能く久しかんや)。

昭公二十一年(前五二一)、伶州鳩は、無射を鋳造した景王が心臓の病で死去すると予言する。それは、調和した音楽が耳から入って心臓に届き、心臓が安んじれば楽しくなるのに対し、無射のような響きすぎる粗大な音は心臓を動揺させ、動揺が病気を引き起こすからであるという。果たして、景王は、その翌年、心臓病でなくなったとされる。

さて、この景王の故事で、無射の鋳造は二つの点から不吉であったとされている。一つは、財政の圧迫である。大鐘の鋳造には莫大な経費が必要となり、国家の経済を圧迫する。二十一年の「大銭」の鋳造に続いて、無射の大鐘を鋳ることは、経済を破綻させ、民心を離反させる失策だとされているのである。

今ひとつは、音楽理論上の問題である。景王は、「将に無射を鋳て、之が大林を為らんとす」、すなわち、無射の大鐘を鋳て、さらにその覆いとして大林の大鐘を作ろうとした(注8)。単穆公や伶州鳩の説明によれば、無射は陽声の細音、大林は陰声の大音であり、これでは両者が相犯して聞こえなくなるという(注9)。

伶州鳩は結論として、「今、細は其の主に過ぎて正を妨げ、物を用いること度に過ぎて財を妨げ、正害われ財匱しく楽を妨ぐ」と諫言する(注10)。この言が端的に示すとおり、無射の鋳造は「財」と「楽」との両面から否定されるべき愚行だったのである。

それでは、この故事を念頭に置いて、『荘王既成』を振り返ってみよう。荘王は無射を鋳造し、沈尹子桱に、「吾れ既に果く無射を成し、以て春秋の嘗に供し、四隣の賓を待す。吾が後の人、幾何か之を保たん」と聞いている。質問の意味自体は明快であるが、ここは、話の作りとして、やや強引であるようにも思われる。なぜなら、荘王は無射を鋳て、さっそくそれを祭祀や宴席に使いながら、一方で、それがいつまで保持できるのかと質問しているからである。得意の心情と一抹の不安とが交錯した言動となっている。これは、次の沈尹子桱の言を導くためにどうしても必要な仕掛けだったのであろうが、やや不自然な印象も残る。

ともあれ、この下問に対して、沈尹子桱は答えを一旦固辞する。不吉な回答となることが分かっていたからである。しかし王は答えを強要する。そこで仕方なく子桱は答える。「四と五との間ならんか」と。すなわち、荘王

以後、四～五代で現状の隆盛を保持できなくなり、完成した大鐘（無射）を手放すことになろうとの予言である。荘王以後、四～五代と言えば、ちょうど楚が危機を迎える平王・昭王の代を指す(注二)。昭王十年（前五〇六）、呉王闔閭の侵攻により、国都の郢が陥落したのは、その最たる出来事であろう。伍子胥によって平王の墓が暴かれたのも、この時のことである。

この言に対する王の反応は、不思議なことに、拒絶や反論ではなく、その予言の詳細説明を促す役目を果たしている。すなわち、四、五代後に大鐘（無射）を奪われるとすれば、それは、伝車（駅車）によって持ち去られるのか、つまり楚は中原の国によって滅亡の危機に晒されるのか、それとも、大船によって持ち去られるのか、つまり長江流域の国によって滅亡の危機に晒されるのか、という質問である。『荘王既成』は、これに対する沈尹子桎の答え、すなわち、「四舸以て逾さん」という言葉で終結している。

このように、『荘王既成』では、荘王による無射の鋳造と沈尹の不吉な予言とが対応関係にある。無射の鋳造がなぜ不吉なのかの説明は全くなされていないが、この背景には、当然、『国語』周語や『左伝』昭公二十一年に解説されたような意識が存在するのであろう。つまり、「財」と「楽」との両面から、無射の鋳造は不吉なのである。沈尹子桎はそのことが分かっていたから答えを固辞した、とされているのである。

三　『荘王既成』の成立

それでは、この文献はいつ、どのような目的で著作されたのであろうか。『荘王既成』は、これに続く『申公臣霊王』と同冊の竹簡に記されていた。従って、その文献的性格については、両者を総合的に検討する必要があるが、少なくとも、楚の王に関する故事を墨釘で区切って連続的に筆写したもの、とは言えるであろう。詳細については別稿において検討することとし、ここではとりあえず、『荘王既成』に限定して、考察を進めてみたい。

まず、『荘王既成』の成立の上限は、荘王の在位年である紀元前六一三～五九一年である。一方、下限は、上博楚簡の筆写時期とされる戦国時代中期（紀元前三百年頃）である。では、『荘王既成』の成立は、この間のどの辺りに該当するであろうか。この問題は、沈尹子桎の予言をどのように捉えるかにかかっているであろう。つまり、こうした予言が実際に荘王の時代になされたと考えるか、それとも、後世、楚が滅亡の危機に瀕したのを受けて作

られたと考えるかである。

まず、初めの荘王の問い「吾が後の人、幾何か之を保たん」までは、荘王期の実録として考えることも、一応は可能であろう。しかし次の「之を伝車に載せて以て上さんか。抑も四舸以て逾さんか」という荘王の問いはどうであろうか。これは、中原の国と長江流域の国との二つの脅威を前提にした発言である。

確かに、当時、中原の霸者であった晋は、楚にとって大きな脅威であった。荘王の時代には、邲の大戦（前五九七年）を経験している(注12)。しかし、長江流域の呉の軍事的脅威が顕在化するのは、「呉始伐楚」（『左伝』成公七年）とある前五八四年以降である。これは、楚の荘王期ではなく、次の共王以降の時代に当たる。もちろん、隣接する大国は、その存在自体が潜在的脅威となるわけであるが、この荘王期において、晋と呉とを並列して、その脅威を語らねばならぬ必然性は、まだ稀薄であったと言えよう。楚が呉の脅威に晒されるのは、後の昭王の時代である。

そうした時代の雰囲気を伝える説話が『説苑』権謀篇に収録されている。

晋人已勝智氏、歸而繕甲砥兵。楚王恐、召梁公弘曰、「晋人已勝智氏矣。歸而繕甲兵。其以我爲事乎」。梁公曰、「不患、害其在呉乎。夫呉君恤民而同其勞、使其民重上之令、而人輕其死以從上使。如虜之戰、臣登山以望之、見其用百姓之信必也。勿已乎。其備之若何」。不聽、明年、闔廬襲郢（晋人已に智氏に勝ち、帰りて甲を繕い兵を砥く。楚王恐れ、梁公弘を召して曰く、「晋人已に智氏に勝つ。帰りて甲兵を繕う。其れ我を以て事を為さんか」。梁公曰く、「患えざれ、害は其れ呉に在り。夫れ呉君は民を恤みて其の労を同じくし、其の民をして上の令を重んぜしめ、而して人も其の死を軽んじて以て上使に従う。如虜の戦、臣山に登りて以て之を望み、其の百姓の信を用いること必なるを見る。已む勿かれ。其の之に備うること若何」。聴かず、明年、闔廬郢を襲う）。

ここでは、楚の昭王が、晋の侵攻を恐れているのに対して、臣下の梁公弘は、むしろ脅威となるのは呉であり、呉に対してこそ防備を進める必要があるでしょうと進言している(注13)。この説話では、結局昭王は、梁公弘の進言を受け入れず、その翌年、呉王闔閭による郢の襲撃を招いたとされている。このように、楚にとって、晋と呉との脅威がほぼ並列的に語られるのは、昭王期であった

ことが分かる。

では、昭王期以降の成立の可能性は、どの辺りまで想定されるであろうか。楚は昭王十年とその翌々年、二度にわたって国都郢を呉に奪われるが、すぐに奪還している。それは、呉が越との抗争に入り、対楚戦への余裕を失ったからである。その後、呉は越との長期戦を経て、前四七三年に滅亡し、楚に併呑される。一方、晋も、前四五三年に有力貴族韓・魏・趙の三氏に実権を掌握され、三分裂の状態となる。戦国時代に入ると、中国はいわゆる七雄割拠の形勢となり、楚の最大の軍事的脅威は西方の秦となる。

とすれば、晋と呉とを二つの脅威として並列的に語り得る時期としては、楚の昭王期から次の恵王（在位は前四八八～四三二年）の初期が最も相応しいと言えよう。もちろん、さらに後世になってから、当時を回顧してこうした話を記述することは可能であるものの、執筆動機としては弱く、文献成立の必然性はかなり低いと言わざるを得ない。

やはり、『荘王既成』は、昭王期の国難を受けて、昭王の時代またはその直後に著作された可能性が高いと言えよう。この文献は、その時期の読者にとってこそ、最も切実な意味を持っていたと考えられる。

なお、ここで文章に着目すれば、沈尹子桱の答えは、「四と五との間ならんか」という一見曖昧な言い回しになっている。しかしこれは、この話が実際の予言を基にしているかのように偽装するための作為であろう。ずばり、昭王の時代です、という答えでは、あまりに露骨な作り話になってしまう。また、「之を伝車に載せて以て上さんか。抑も四舸以て逾さんか」という荘王の質問や、「四舸以て逾さん」という沈尹子桱の答えも、呉王闔閭の侵攻による国都陥落を端的に指摘するのではなく、意味深長な発言となっている。ここにも、著作者の意図が感じられよう。あまりに端的な予言では、話自体が捏造ではないかと読者を白けさせる恐れがある。そこで著作者は、こうした意味深長な予言を語らせることにより、この話に奥行きを与えようとしているのである。

このように考察を進めれば、本文献の著作意図も、自ずから明らかになるのではなかろうか。昭王期の国都陥落という危機は、約百年前の荘王の時代にすでに予言されていた。こうした説話の構造は、昭王期の国難が、昭王自身の失政によってのみもたらされたものではなく、それを遡る五代前の楚王の時代にその淵源があると示唆していることになる。春秋の五霸の地位に躍り出た荘王は、無射の鋳造を敢行した。それは、「財」と「楽」の両

面から否定されるべき行為であった。無射の鋳造は、荘王の失政と驕慢を象徴する出来事だったのである。とすれば、国家の危機は、その絶頂期においてこそ、その萌芽を内包していると、この文献は語っているのではなかろうか。危難は百年という歳月をかけて静かに忍び寄ってきていたのだ、と説いているのである。

こうした予言構造を持つ説話は、『左伝』や『国語』にも頻出する。五代先（約百年後）を見越したような予言はそう多くはないが、例えば、『国語』周語中には、魯の大夫の滅亡を予言する単子の言葉が次のように見える。

定王八年、使劉康公聘于魯、發幣于大夫。季文子、孟獻子皆儉、叔孫宣子、東門子家皆侈。歸、王問魯大夫孰賢。對曰、「季、孟其長處魯乎。叔孫、東門其亡乎。若家不亡、身必不免」。……王曰、「幾何」。對曰、「東門之位不若叔孫、而泰侈焉。不可以事二君。叔孫之位不若季孟、而亦泰侈焉。不可以事三君。若皆蚤世猶可。若登年以載其毒、必亡」。（定王八年、劉康公をして魯に聘せしめ、幣を大夫に発す。季文子・孟獻子皆倹、叔孫宣子・東門子家皆侈る。帰りて、王、魯大夫孰れか賢なると問う。対えて曰く、「季・孟は其れ長く魯に処らんか。叔孫・東門は其れ亡びんか。若し家亡ばずんば、身必ず免れず」。……王曰く、「幾何ぞ」。対えて曰く、「東門の位は叔孫に若かずして、泰侈なり。以て二君に事うべからず。叔孫の位は季孟に若かずして、亦た泰侈なり。以て三君に事うべからず。若し皆蚤世せば猶お可なり。若し年を登せて以て其の毒を載（のこ）えば、必ず亡びん」。）

周の定王の八年、周は劉康公を使者として魯に派遣した。その際、魯の季文子と孟献子は質素であったが、叔孫宣子と東門子家とは贅沢な様子であった。この報告を聞いた定王は、魯の大夫の内、誰が賢者かと単子に尋ねた。単子は、季文子と孟献子は長く魯に止まるであろうが、叔孫宣子と東門子家は亡びるであろうと予言する。そして、「幾何ぞ（どれくらいで亡ぶのか）」という王の問いに対して、単子は、東門子は二代の君に仕えることはできず、叔孫は三代の君に仕えることはできないでしょうと予言する。

ここでは、二代または三代先の亡びが予言されている。『荘王既成』は、こうした予言の時間幅をさらに長期に設定したものであると言えよう(注14)。

そして、かかる予言は、これからの楚国を担っていく

王や太子にこそ、大いなる教戒としての意味を持つ。財政や音律を無視した無射の鋳造は、大失政の一例である。たとえ、そうした行為が今すぐ悲劇となって現れないとしても、いつか必ず国家を危急に陥れる。このような戒めとして、この文献の内容は楚の為政者に強く迫ってきたであろう。

結語

本篇の主題について、原釈文を担当した陳佩芬氏は、霸主の地位をいかに保持するか、であると説く。いつまで保持できるのかと質問したのが荘王であり、それに『易』の言葉で答えたのが沈尹子桱である、との理解である。しかしながら、『周易』習坎から導かれるという答えは、その彖伝に説く「習坎、重險也」、すなわち重なり合う険難というものであって、王の問いに対する明快な答えとはならない。その次の問答も、「載」せる物が不明となるため、文意が通りづらい。

やはり本篇は、荘王の大鐘鋳造と、それを受けた沈尹子桱の予言とに最大の眼目があると考えられよう。沈尹の予言は、楚昭王期の国都陥落を踏んだ亡びの予言であった。楚の王や太子にとって、それは、大いなる教戒の言となったはずである。

注

(1) なお、以下に引く諸氏の見解は、すべてインターネット上に次のように公開されているものである。

・陳偉「読《上博六》条記」
・凡国棟「読《上博楚竹書六》記」
・何有祖「読《上博六》札記」
・董珊「読《上博六》雑記」
・蘇建洲「初読《上博（六）》」
・沈培「《上博》字詞浅釈」

以下では繁瑣を避けるため、氏名と要点のみを掲げる。それぞれの詳細については、「簡帛網（武漢大學簡帛研究中心）」(http://www.bsm.org.cn/index.php)、「簡帛研究」(http://www.jianbo.org/) 参照。

(2) 孫叔敖・沈尹莖相與友。叔敖遊於郢三年、聲問不知、修行不聞。沈尹莖謂孫叔敖曰、「說義以聽、方術信行、能令人主上至於王、下至於霸、我不若子也。耦世接俗、說義調均、以適主心、子不若我也。子何以不歸耕乎。吾將爲子游」。沈尹莖遊於郢五年、荊王欲以爲令尹、沈尹莖辭曰、「期思之鄙人有孫叔敖者、聖人也。王必用之、臣不若也」。荊王於是使

人以王輿迎叔敖以爲令尹、十二年而莊王霸、此沈尹莖之力也。功無大乎進賢。(『呂氏春秋』不苟論贊能篇)

(3) 景王二十一年、將鑄大錢。單穆公曰、「不可。……且絶民用以實王府、猶塞川原而爲潢汚也、其竭也無日矣。若民離而財匱、災至而備亡、王其若之何。吾周官之于災備也、其所怠棄者多矣、而又奪之資、以益其災、是去其藏而翳其人也。王其圖之」。王弗聽、卒鑄大錢。(『国語』周語下)

(4) 二十三年、王將鑄無射、而爲之大林。(『国語』周語下)

(5) 出令不信、刑政放紛、動不順時、民無據依、不知所力、各有離心。上失其民、作則不濟、求則不獲、其何以能樂、三年之中、而有離民之器二焉、國其危哉。(『国語』周語下)

(6) 今細過其主妨于正、用物過度妨于財、正害財匱妨于樂、細抑大陵、不容于耳、非和也。聽聲越遠、非平也。妨正匱財、聲不和平、非宗官之所司也。(『国語』周語下)

(7) 二十四年、鍾成、伶人告和。王謂伶州鳩曰、「鍾果和矣」。對曰、「未可知也」。王曰、「何故」。對曰、「上作器、民備樂之、則爲和。今財亡民罷、莫不怨恨、臣不知其和也。且民所曹好、鮮其不濟也。其所曹惡、鮮其不廢也。故諺曰、『衆心成城、衆口鑠金』。三年之中、而害金再興焉、懼一之廢也」。王曰、「爾老耄矣。何知」。二十五年、王崩、鍾不和。(『国語』周語下)

(8) 韋昭の注に「景王二十三年、魯昭二十年也。賈侍中云、無射、鍾名、律中無射也。大林、無射之覆也。作無射、爲大林以覆之、其律中林鍾也」と説く。但し、この一文には異説もある。

(9) 単穆公は「且夫鍾不過以動聲、若無射有林、耳弗及也。夫鍾聲以爲耳也、耳所不及、非鍾聲也」と諫言し、また、伶州鳩は「物得其常曰樂、極之所集曰聲、聲應相保曰和、細大不逾曰平。……今細過其主妨于正、用物過度妨于財、正害財匱妨于樂、細抑大陵、不容于耳、非和也。聽聲越遠、非平也」と説いた。『国語』韋昭注も、「若無射復有大林以覆之。無射、陽聲之細者也。林鍾、陰聲之大者也。細抑大陵、故耳不能聽及也」と説く。

(10) 今細過其主妨于正、用物過度妨于財、正害財匱妨于樂。……若夫匱財用、罷民力、以逞淫心、聽之不和、比之不度、無益于教、而離民怒神、非臣之所聞也。(『国語』周語下)

(11) 莊王以下の王は、共王、康王(共王の子)、郟敖(康王の子)、靈王(公子圍、康王の弟)、訾敖(公子比、康王の弟)、平王(棄疾、康王の弟)、昭王(平王の子)となるが、この内、郟敖は公子圍に弑殺されて短命で終わり、訾敖も靈王の後即位したもののすぐに自殺したため、「王」とは称されない。このため、共王から起算して、四代目が平王、五代目が昭王となる。

(12) また、『説苑』君道篇には、晋と楚とが敵国であると指摘

する大夫の言が次のように記されている。「楚莊王好獵、大夫諫曰、「晉楚敵國也。楚不謀晉、晉必謀楚。今王無乃耽於樂乎」。

(13) もっとも、この説話については、すでに『説苑纂註』が指摘するとおり、晉が智伯を殺した年（前四五三）と呉王闔閭による楚都郢侵攻（前五〇六）との間に時代錯誤がある。ただ、昭王期の楚にとって、晉と呉とが軍事的脅威と感じられていたことを伝える一つの資料にはなりうるであろう。

(14) なお、凡国棟氏は、国家の興亡と世代数とをからめた表現として、『論語』季氏篇の「孔子曰、天下有道、則禮樂征伐自天子出。天下無道、則禮樂征伐自諸侯出。自諸侯出、蓋十世希不失矣。自大夫出、五世希不失矣。陪臣執國命、三世希不失矣。天下有道、則政不在大夫。天下有道、則庶人不議」、同じく季氏篇の「孔子曰、祿之去公室、五世矣。政逮於大夫、四世矣。故夫三桓之子孫、微矣」などを指摘する。ただこれらは、国家の衰退を表す定型的な言い回しであって、『国語』や『左伝』に見られるような具体的事象に対する個別的な予言とは、やや性格を異にしているように思われる。

［付記］
本稿は、平成十九年度日本学術振興会・科学研究費補助金 基盤研究（B）「戦国楚簡の総合的研究」（研究代表者・湯浅邦弘）による研究成果の一部である。